日本中國學會報　第七十四集
二〇二二年十月八日　發行　抜刷

宋代の考證學に關する試論

――清朝考證學との關係について――

水上雅晴

宋代の考證學に關する試論

――清朝考證學との關係について――

水上雅晴

問題の所在

中國の朝代の中、「考證學（考據學）」と結びつけられるのは清代のみと言ってよいが、古典籍の實證的な研究は清代の專賣特許でなく、他の朝代においても「考證學」に屬する營爲は行われていたに違いない。現に『明代考據學研究』と題する一書が刊行されている。同書の著者林慶彰は「明代考據學」を構成する內容を以下の六項目にまとめている。

一、經書の考察、二、文字音義の考察、三、僞書の辨定
四、史地の考訂、五、動植物の考察、六、民間文學の考察[1]

ここに列擧されている項目が清朝考證學を構成する內容の全てであると言うことはできないが、六番目を除く五つの項目は清朝考證學の主要な構成要素と重なっていると見られる。林氏の書物においては、六項目の中の複數項目に屬する學術的營爲に從事した十人の學者の學問について縷說されているから、「明代考證學」と稱し得る實態が確かに存在していたと言える。しからば考證學は明代に始まるかと言えばそうではあるまい。

考證學の始まりと發展の狀況を取りあげた論考はほとんど發表されていないが、この問題に取りくんだ數少ない研究者として張舜徽が擧げられる。張氏は四萬字を優に超える長篇論文「論宋代學者治學的博大氣象及替後世學術界所開辟的新途徑」の冒頭部において、以下のように宣言する。「條理がしっかりしていて釋義と考據が深いと全ての清代の考證學者が自ら誇る、舊來の學問を整理する方式と方法は、どれもこれも宋代の學者が從事した學問の範圍を超えられておらず、清代の考證學者が各分野の學問において行った講究は、いずれも宋代の學者たちによって既に道が切り開かれ、條件が整えられていたものであった。[2]」この見解は、宋代の多くの學者が從事した多方面にわたる考證學的營爲の豐富な事例を詳論した結果、打ちだされたものであり傾聽に價する。

宋代の個々の學者による考證學的營爲に着目した研究は、錢穆が「朱子之校勘學」「朱子之辨僞學」「朱子之考據學」を發表して以降、斷續的に行われており、近年、書名の副題に「南宋考據學」の語を持つ研究書が刊行されたことは、考證學が清代特有の營爲ではなかったという認識が廣がってきたことを示す。[3]そうなると、考證學について

宋以降の發展という觀點からの研究が可能な狀況が到來したと考えられ、本稿では、宋代における考證學の營爲の一端と清代の學術との關連について解明を試みる。

一、「考證學」を構成する項目

張舜徽の前掲論文中に掲げられている小見出しを抜き出して順番にならべると、以下のような目次ができあがる。

第一、古代の文化遺產受容にかかわる各種の作業
　甲　古書の時代と作者の考證、乙　古代の重要な經典の整理、丙　群書の校勘、丁　群書の目錄の作成、戊　字形・字音・字義にかかわる研究、己　古代遺物の整理
第二、史料整理に關する各種の作業
　甲　同時代の史籍の整理、乙　舊史の整理（一、舊史の改修、二、舊史の考證）、丙　編述事業の偉大なる成果（一、大部な編年史の出現、二、記事本末體の創立、三、百科全書式の通史の編纂、四、方志と地圖）
第三、自然科學に關する各種の研究事業
　甲　天文算術方面の發明、乙　建築工事方面における成果、丙　地質化石鑛物資源の鑑別、丁　動植物學の研究

豫備知識なしにこの目次だけ見せられたら、清朝考證學を總論した文章だと思う人が少なくないであろう。以下に列擧する十一項目は、清代の考證學者が從事した學術的營爲を梁啓超が整理したものであるが、十一番目を除き、それ以外の各項目に相當する項目を右の目次に見つけることは難しくない。

（一）經學、（二）小學と音韻學、（三）先秦の子書とその他の書籍の校注、（四）辨疑書、（五）輯佚書、（六）史學、（七）方志學、（八）地理學、（九）譜牒學、（十）曆算學とその他の科學、（十一）樂曲學[4]

このように宋代と清代においてなされた考證學の營爲を構成する項目の多くが共通しているのは、偶然であろうか。紙數の制約があるので、張舜徽の論文において取りあげられている項目の中、第一部の甲と丙、端的に言い換えると辨疑と校勘に着目して、宋儒と清儒による經學に關する營爲に限定して比較してみたい。辨疑と校勘を論點に選ぶのは、考證を進めるための材料となるテキストの確定にかかわる基本的營爲だからである。

二、宋代における辨疑

孟子が「盡く『書』を信ずるは、則ち『書』無きに如かず。吾、武成に於いて、二、三策を取るのみ」（『孟子』盡心下）と述べているように、古典籍に對して、「辨疑[5]」、すなわち僞作と判斷したり、信を置くことのできない記述が含まれていると指摘したりすることは、中國において早くから行われていた。信頼性に缺ける文獻や記述は、客觀性が求められる思想・學術的營爲に用いることができないからである。

梁啓超によると、辨疑の學が盛んになり、發展の基礎が築かれたのは宋代であった。

古書を疑う點で宋人が最も果敢であり、司馬光が『孟子』を疑ったり、歐陽修が『易』の十翼を疑ったり、『周禮』と『儀禮』を疑ったり、朱熹が『周禮』を疑ったり、『古文尚書』を疑ったり、鄭樵が『詩經』の序を疑ったり、『左傳』を疑ったりしたことは、いずれも後代の辨疑學の先驅けである。[6]

この議論を發展させた張舜徽は「宋人は、思い切りよく疑古に踏み込み、僞書辨證の方面に大きな道を切り開き、後人に様々な問題分析の方法と啓示を與えた」（前掲書、二一三頁）と述べた後、儒家の經傳に對する宋儒の辨疑について具體例を擧げながら解說していく。

『易經』については、「十翼」は孔子の作ではないと論じた歐陽修を取りあげ、『居士集』卷十八所收の「易或問」を引述する。『書經』については、文體の違いを根據に晩出の『古文尙書』の僞作を疑った吳棫の見解を踏まえ、朱熹が古文經のみならず、孔安國傳にも疑念の目を向けたことを論說する。『詩經』については、小序の作者が誰であるかに關して、漢以降さまざまな說が提出されたものの、いずれも孔門につらなる者と見る點では一致していたが、鄭樵が從來の見解に異を唱え、田舍の無學者の作だと主張し、朱熹がそれに同調したことを敍說する。『周禮』については、『漢書』儒林傳が他の經書と異なり『周禮』についてだけ師授に關する記錄を缺いていることから、王莽に仕えた劉歆の手になると疑った洪邁の說を引照する。『左傳』については、王安石・王應麟・葉夢得・鄭樵が疑念を表明していることを指摘し、孔子と同時代であるはずの左氏が著した『左傳』に、孔子よりかなり下る時期の記事、一部には周秦交代期の記事までもが含まれていることを論じる葉・鄭二氏の說を詳述する（前掲書、二一三～二二一頁）。

宋儒によってなされた辨疑は、張舜徽が例示する事例にとどまらない。宋代の辨疑學に關する先行研究を參考にして、儒家の經傳に對する宋儒による辨疑の主たる論點と個々の論點にかかわる議論を提出した學者を整理すると以下のようになる。[7]

○易經：①「文王重卦」說（楊繪、劉安世、吳沆、陸九淵、葉適、陳元綱）、②卦爻辭の作者（劉安世、李石）、③十翼（范諤昌、歐陽修、李淸臣、王開祖、劉安世、高似孫、鄭厚、鄭樵、〔鄭樵〕[8]、馮椅、楊簡、吳仁傑、葉適、章如愚、李心傳、方實孫、徐總幹、趙汝楳、王柏、金履祥、張文伯）、④古經〔錯簡〕の復原（胡旦、胡瑗、王洙、邵雍、郝氏、張載、呂大防、程頤、蘇軾、晁說之、朱震、鄭厚、郭雍、李石、林栗、程迥、朱熹、薛季宣、呂祖謙、楊萬里、周燔、馮椅、吳仁傑、俞琰）

○書經：⑤孔序と孔傳（朱熹、王柏、金履祥）、⑥小序（吳棫、林之奇、朱熹、葉適、蔡沈、馬廷鸞、金履祥）、⑦古文尙書（程頤、晁說之、吳棫、朱熹、趙汝談、陳振孫、張文伯）、⑧古經〔錯簡〕の復原（龔鼎臣、劉敞、宋祁、程頤、蘇軾、晁說之、吳棫、胡宏、林之奇、洪邁、朱熹、蔡沈、劉昌詩、章如愚、陳經、陳大猷、王柏、金履祥）

○詩經：⑨「孔子刪詩」說（歐陽修、〔鄭樵〕、葉適、朱熹、車似慶、方岳、王柏）、⑩詩序（歐陽修、劉敞、王安石、程子、王得臣、蘇轍、晁說之、葉夢得、曹粹中、晁公武、鄭樵、程大昌、黃櫄、王質、朱熹、楊簡、王柏）、⑪漢儒疑纂の篇（車似慶、王柏、車若水、金履祥）、⑫古經〔錯簡〕の復原（蘇轍、程大昌、王質、朱熹、呂祖謙、王柏）

○周禮：⑬作者と制度（歐陽修、王開祖、蘇軾、蘇轍、晁說之、范浚、胡宏、陳汲、洪邁、葉適、魏了翁、林希逸、黃震、羅璧）、⑭「冬官補亡」說（楊時、胡宏、程大昌、俞庭椿、王與之、丘葵）

○儀禮：⑮作者と成立（樂史、徐積、程頤、〔鄭樵〕、張淳）

○禮記：⑯諸篇（李覯、呂大臨、高閌、范浚、朱熹、葉適）、⑰中庸（歐陽修、晁說之、王十朋、陳善、林光朝、葉適）、⑱大學（程子、

呂大臨、林之奇、朱熹、董槐）

○春秋：⑲左傳と左丘明（王晳、劉敞、鄭獬、程頤、葉夢得、〔鄭樵〕、王觀國、程大昌、朱熹、陳傅良、魏了翁、羅璧）、⑳公・穀二傳の成立と作者（劉敞、葉夢得、〔鄭樵〕、羅璧）、㉑經と傳の關係（歐陽修、劉敞、葉夢得）、㉒義例（石介、邵雍、劉敞、程頤、葉夢得、洪興祖、林之奇、朱熹、薛季宣、蔡沆、程公說）

○論語：㉓古經〔錯簡〕の復原（程頤、朱熹、王柏）

○孝經：㉔作者と成立（晁公武、陳騤、項安世、朱熹）

○孟子：㉕經文（司馬光、馮休）

○爾雅：㉖作者と時代（歐陽修、呂南公、葉夢得、曹粹中、鄭樵、王質、朱熹）

今後の增補を必要とするこの一覽は、あくまでも儒家の經傳の辨疑にかかわった學者を竝べたものであり、經傳以外の書物に對する辨疑を行った學者は一覽に含まれていない。[9] 辨疑に從事した宋儒の問題意識を示す言葉として、朱熹の後學である王柏の發言を引いておこう。「もし輕率に改め、古くから傳わる經文を大事にして疑問を疑問として殘すことを知らなければ、まったくもって學者にとって罪に問われることである。古いものにしがみついて、理によって判斷して古い形に戻すことを知らないのは、先儒が後學に望むことであろうか。[10]」王柏は、古典籍の文字を安易に改めることを戒めつつも、辻褄の合わない記述については改めることをタブー視しない。かかる態度が經書に發揮されると、傳統墨守派から「改經」と評される所業になる。

清末の皮錫瑞は、經書の枠組とテキストが定まり、基本注釋もほぼ出揃った後漢を「經學極盛時代」（『經學歷史』第四章）と位置づける一方で、舊來の經學に異を立てた宋代を「經學變古時代」（同第八章）と稱し、さらに後漢の經學が復興された清代を「經學復盛時代」（同第十章）と稱する。今なお影響力を發揮しているこの認識の枠組に從うと、宋代の經學は清代の經學と性格が根本的に異なっており、上に列擧した辨疑の項目とそれにかかわる營爲を行っている學者の多さは、宋代經學が持つ「變古」の性格を如實に示すものと言える。それならば清代における經學の營爲の中では、宋儒が辨疑の矛先を向けた論點は取りあげられることがなかったのであろうか。

三、清代の辨疑と宋儒說の扱い

前節で提起した疑問を解決するために、上に列擧した宋儒による辨疑の論點の中、清儒（民國に入ってから亡くなっている學者は除外した）によって同樣に辨疑の對象にされたものがどれだけあるかを調べてみた。暫定的な調査の結果は以下の通りである。[11]

○易經：①「文王重卦」說（顧炎武『日知錄』卷一「重卦不始文王」）、③十翼（戴震『戴東原集』卷一「周易補注目錄後語」、崔述『洙泗考信錄』卷三「歸魯上」）

○書經：⑤孔序と孔傳（朱彝尊『曝書亭集』卷五十八「尙書古文辨」、閻若璩『尙書古文疏證』）、⑥小序（顧炎武『日知錄』卷二「書序」、閻若璩『尙書古文疏證』、劉逢祿『尙書今古文集解』卷三十「書序」）、⑦古文尙書（黃宗羲『孟子師說』卷七「盡信書章」、顧炎武『日知錄』卷二「古文尙書」、朱彝尊『曝書亭集』卷四十二「讀武成篇書後」、閻若璩『尙書古文疏證』、姚際恆〔『尙書古文疏證』卷八第百二十一條〕、李紱『穆堂初稿』卷十九「古文尙書攷」、惠棟『古文尙書攷』、戴震『戴東原集』卷一「尙書今文古文考」、錢大昕『潛研堂文集』卷五「答問二第十條」、姚鼐『惜抱軒九經

說』卷三「尙書說一」、崔述『古文尙書辨僞』卷二「集前人論尙書眞僞」、劉逢祿『尙書今古文集解』卷三十「書序」、魏源『書古微』序）

○詩經：⑨「孔子刪詩」說（萬斯同『群書疑辨』卷一「詩說」）、⑩詩序（姚際恆『詩經通論』序、萬斯同『群書疑辨』卷一「詩序說」、崔述『洙泗考信餘錄』卷二「子夏」、牟應震『詩問』〔序を削除〕、嚴可均『鐵橋漫稿』卷四「對丁氏問」第二條、魏源『詩古微』上編之二「毛詩義例篇上」、吳汝綸『桐城吳先生文集』卷四「詩序論一」）、⑫古經〔錯簡〕の復原（顧炎武『日知錄』卷三「四詩」、崔述『讀風偶識』卷一「通論二南」）

○周禮：⑬作者と制度（毛奇齡『經問』卷二第一條、萬斯大『周官辨非』、方苞『周官辨』「辨僞一」、顧棟高『春秋大事表』卷四十七「左氏引經不及周官儀禮論」）、江永『周禮疑義擧要』卷六「考工記」、崔述『豐鎬考信錄』卷五「周公相成王下」、『四庫提要』卷十九「周禮注疏」）

○儀禮：⑮作者と成立（毛奇齡『經問』卷三第二條、姚際恆『儀禮通論』卷前「論旨」、顧棟高『春秋大事表』卷四十七「左氏引經不及周官儀禮論」）、崔述『豐鎬考信錄』卷五「周公相成王下」

○禮記：⑯諸篇（顧炎武『日知錄』卷七「考次經文」）、⑰中庸（姚際恆〔杭世駿『續禮記集說』卷八十六「中庸」所引〕、崔述『洙泗考信餘錄』卷三「子思」）、⑱大學（崔述『洙泗考信錄』卷一「曾子」）

○春秋：⑲左傳と左丘明（顧炎武『日知錄』卷四「春秋闕疑之書」、劉逢祿『左氏春秋考證』）、⑳公・穀二傳の成立と作者（阮元『春秋穀梁傳注疏校勘記』序、陳澧『東塾讀書記』卷十「春秋三傳」第十六條）、㉑經と傳の關係（姚鼐『惜抱軒九經說』卷十五「春秋說・天王使宰咺來歸惠公仲子之賵說」）

○論語：

○孝經：㉔作者と成立（姚際恆『古今僞書考』「孝經」、楊椿『孟鄰堂文鈔』卷六「讀孝經」、崔述『洙泗考信錄』卷四「考終」、宋翔鳳『過庭錄』卷十「孝經」）

○孟子：

○爾雅：㉖作者と時代（姚際恆『古今僞書考』「爾雅」、崔述『豐鎬考信錄』卷五「周公相成王下」、『四庫提要』卷四十「爾雅註疏」、段玉裁『經韵樓集』卷四「讀爾雅釋山論南嶽」、陳澧『東塾讀書記』卷十一「小學」第三條）

この一覽を見ると、清代においても辨疑の議論がかなり活潑になされていて、宋代と同じ論點が取りあげられることが珍しくなく、清代の經學にも「變古」と稱されるだけの辨疑の要素が含まれていたことがわかる。清代の辨疑を專論した佟大群の研究によると、清代の辨疑學者は少なくとも二百十一名いる。[12] 宋・清兩代において等しく辨疑の營爲が盛んであったことが判明すると、兩者の關係が檢討課題として浮かびあがってくる。

『古文尙書』が僞作であることを論證し、「在來の經學に對してその經書觀の修正ないしは淸算をうながす」[13] 衝擊を學界にもたらした閻若璩（字は百詩）の發言をまず見てみよう。「吳棫、字は才老なる者が出て、はじめてこの書（『古文尙書』）を疑ったのは、まことに天がはじめてその御心を明らかにされたということができる」[14] と述べるように、閻氏は吳棫を『古文尙書』にかかわる辨疑の先驅者と位置づけている。次に姚鼐は、僞『古文尙書』にも「理に當たる」部分があるのだから

退ける必要はないと擁護する意見があることを紹介した後、それに反論するために「大いに理に背き淺鄙なる見」がその中に散在することを示す證據を七つ擧げた上で、「朱子が最初に僞りをなす者の詐術に氣づき、後人はそのヒントを手掛かりにして探究し、閻百詩の輩に至って、裁きをつけるかのように惡事の證據をすべて暴き出した[15]」と述べ、閻若璩の辨疑の先蹤を求めると朱熹まで遡ることを說いている。さらに崔述は、『書經』に關する言說が集められている『朱子語類』卷七十八から朱熹の發言を二條引いた後、「案ずるに朱子のこの言葉は明らかに（『古文尙書』の）二十五篇を僞撰としているが、殘念なことに門人に向かって言うだけで、自分で『書經』の注釋を作り、僞作の部分をすべて除去して眞なる部分だけを殘すことはしていない[16]」と述べ、やはり『古文尙書』僞作說の淵源を朱熹に求めている。

右の諸事例は「改經」を伴う宋儒の辨疑を肯定的に評價する淸儒がいたことを示すが、顧炎武もその一人である。『日知錄』卷七に「考次經文」と題する一文があり、冒頭部で『禮記』樂記「子贛見師乙云云」節の「寬而靜」から「肆直[17]而慈」に至る一段（四十八字）は、少し前にある「愛者、宜歌商」句の上に持ってくると文義がはっきりするとの見解が開陳されており、顧氏も經文の配列を再編する「改經」をタブー視していなかったことが看取される。つづく文章では、『書經』武成には錯簡があるが、文中に修正の參考になる干支の日附が多く含まれていて、蔡沈がそれを手掛かりに「今考定武成」と題する改訂經文（『書經集傳』卷四所收）を作成したことが好意的に紹介される。さらに宋儒の程子・蘇軾・朱熹が「經文を攷定した」事例が八つ列擧された後、これらの「改經」が「いずれも至當であって議論の餘地がない」と是認されている。

先の梁啓超と張舜徽の言葉を振り返ると、二人とも宋代に盛んとなった辨疑の學が「後代」や「後人」の先驅けとなる營爲であると指摘していた。辨疑の學が一つの學問分野として確立したと彼らが見ていた時期は淸代であり、そのことは梁啓超が上揭の言葉につづいて「淸に入ってこの學（辨疑學）はますます盛んになった」と述べていることから了解される。しからば宋と淸の辨疑の違いはどこにあるのか。梁啓超は宋と淸の辨疑を比較して、「淸儒の辨僞作業が貴重なのは、識別したその成果ではなく、辨僞の方法を生みだして巧みに運用した點に求められる[18]」と述べ、兩者の違いは方法論の有無にあると指摘する。すると淸儒が案出した辨疑方法の內容が次なる檢討課題になるが、本稿の目的は宋・淸兩代において辨疑が廣く行われていて兩者に關係があったことを確認することまでであり、これまでの議論を通してその目的は達成されたと考えられるので、ここで考察對象を校勘に變えることにする。

四、宋代における校勘

變容・混亂した古典籍のテキストを原初の形、もしくはあるべき形に戻す必要性も中國においては早くに認識されており、そのために行われる作業が校勘である。校勘が大々的に行われたことが最初に確認されるのは、前漢である。『漢書』藝文志「總序」によると、成帝の命を受けて實施された宮中藏書整理作業は、劉向・任宏・尹咸・李柱國がそれぞれ專門分野の典籍を「校」すなわち校勘し、一書の校勘が終わるたびに劉向が篇目を整理し、要點を拔き出して「錄」すなわち目錄を作成して奏上している[19]。「校」と「錄」とは作業の內容と位相を異にする言葉であり、第一段階の「校」の意味しかもたないはずの

「校勘（校讐）」の語について、第二段階の「錄」の意味を合わせもつ用法があることを問題視する研究者もいるが、その用法が定着している。[20]

張舜徽によると、漢以降では宋人が最も校勘に精勵している。北宋の朝廷では國家的な校勘事業が行われ、沈括や蘇頌のような博學な學者たちが參加したので、大きな成果が上がった。當時は、個人單位での校勘も盛んに行われ、經部に屬する書物に對する校勘の重要な成果として、鄭樵『書辨訛』、張淳『儀禮識誤』、朱熹『孝經考異』、毛居正『六經正誤』、岳珂『刊正九經三傳沿革例』が擧げられる（前揭書、二二五頁）。これら諸家の中、張舜徽が注目するのが鄭樵と朱熹であり、二人の營爲は廣義の「校勘」の語が持つ二つの含義をそれぞれ代表する。

鄭樵の『通志』は、「その平生の精力と全書の精華は、二十略にこそある」（『四庫提要』卷五十）と評されているように、『史記』の「書」や『漢書』の「志」に相當し、『通志』の中に二十項目設けられている「略」に本領があり、「校讐」が「略」の一つを占めている（卷七十一）。「校讐略」では書籍における文章の配列・類例・存亡などの問題が取りあげられており、鄭樵は「校讐」を上記の「錄」の意味で使っている。

淸の章學誠によると、鄭樵は「歷代の目錄に著錄された文獻について、魯魚・豕亥といった文字の違いのような細かいことは脇へ置いて、種類と順序に從って分類し、交通整理して、著述に善し惡しが出來る原因を考察することに意を注ぎ」（『校讎通義』敍）、それを「校讐」と稱した。鄭樵の「校讐」は、「（漢の宮中にあった藏書閣である）石渠閣・天祿閣（の藏書の校讐が行われて）このかた、學問をする者がかかる見解に到達したことは恐らくなかった」[21]（同上）と評されるだけの獨自性と意義を備えていた。著述の源流と變遷を考究する鄭樵の目錄學は、章學誠が『校讎通義』を著すきっかけを與えたが[22]、宋代において孤立的な營爲であっただけでなく、淸代においても章氏を除くとほとんど顧みられなかった。そのため「目錄學」の觀點から宋代と淸代の校勘學を比較しようとしても、鄭・章の目錄學の比較以上の議論の廣がりはあまり期待できない。

張舜徽が校勘の面で注目するもう一人の朱熹は、「錄」ではなく「校」の意味における「校勘」に多くの力を注いでいる。朱熹は校勘に關して多くの言葉を殘しており、たとえば錢穆「朱子之校勘學」には、校勘に關する朱熹の發言が六十條以上も收錄されている。古典籍の文字の校勘に關する見解を示すものとしては、以下の文が擧げられる。

> 一般的に古書にはっきりしない箇所があれば、その場その場で論述を加え、讀者の理解を助けるのは構わない。もしはっきりしない箇所をいきなり改めて原文をわからなくしてしまったら、十分に明らかになっていない意味があるのかないのかがわからなくなってしまう。漢儒が經書を解釋する際、文字を改めたい箇所があっても、ただ「某、當に某に作るべし」と言うだけだったが、それでも後世の批難を受けることがある。いきなり文字を改めたらどれだけ批判を受けるか、わかったものでない。[23]（『晦庵集』卷三十「與張欽夫論程集改字」）

このように朱熹は古典籍の文字を安易に改めることに反對するが、その一方で「私が經書の文字を改めるのは、意圖があって行っているのであって、輕々しく改めたりしていない。なぜ改めたのか、その意

味を汲みとって欲しい」[24]（『朱子語類』巻百五「朱子二・論自注書・總論」第四條）とも述べており、「改字」を許容する態度も示している。『大學』・『中庸』・『古文孝經』のテキストを再編成して、それぞれのあるべき姿を示したのは、かかる態度が表出したものと言えよう。

張舜徽はこれらの發言を踏まえ、多くの書物を緻密さと愼重さを極めて校勘した朱熹が隨意に文字を改めてはいけないという道理を示す一方で、古くから傳わるテキストをむやみに信じてはならぬと主張していることに注意を促す。校勘に關する愼重な態度は、清代の著名な校勘學者である盧文弨や顧廣圻によって繼承されており、清代を代表する校勘事業である阮元主編の『十三經注疏校勘記』（以下『校勘記』）においても踏襲されていると解說する（前掲書、二二六～二二七頁）。

ここで留意すべきは、張舜徽が黃廷鑑『第六絃溪文鈔』巻一「校書說」を引いて指摘している通り、『大學章句』傳三章の下に「この章の中で「淇澳」詩が引かれている所より以下の記述は、舊本では誤って『誠意』章の下にあった」（此章內自引淇澳詩以下、舊本誤在誠意章下）と注記されているように、朱熹は底本の文字を改めることがあっても、どのように改めたかの說明を補っていることである。つまり「改字」「改經」を許容しつつも、校勘に用いた底本テキストの復元を可能にする措置を講じているのであり、かかる態度は、宋代の校勘學が倪其心によって「校勘を實踐した豐富な經驗を基礎として、校勘理論が發展に向かう最初の趨勢を示しており、校勘の原則や類別について初步的な歸納・總括・探求が行われ始めた」[25]と評價されるだけの水準に到達していたことを示している。

五、清代の校勘と宋儒說の扱い

（一）盧文弨『儀禮注疏詳校』に見る宋儒の校勘の成果

張舜徽が指摘するように、宋儒の校勘が清儒の校勘に實際に影響を與えることはあったのであろうか。張氏が例示する清代の校勘學者の著作を調べると、盧文弨『儀禮注疏詳校』の卷頭に參考文獻一覽に相當する「儀禮注疏詳校稱引」が揭載されており、そこに宋儒の著述として張淳『儀禮識誤』・李如圭『儀禮集釋』・朱熹『儀禮經傳通解』・黃榦『儀禮經傳通解續』・楊復『儀禮圖』・魏了翁『儀禮要義』が列擧されているのが見つかる。これらの諸書は『儀禮』の注釋書であり、『儀禮識誤』以外は、校勘を目的としたものではないが、各書の經注疏の文字は宋儒各家の校勘を經たものであり、盧文弨はそれらを對校資料に用いている。

具體的な參照狀況を例示すると、「士冠禮」鄭注「水器、尊卑皆用金罍、及大小異」に見える及字に對して、盧文弨は「宜改其載。……案朱子固疑及字誤」の校語を下し、其載二字に改めるべきことを指摘した上で、その見解が『儀禮經傳通解』巻一に見える朱熹の說「注文罍下及字、恐誤」に觸發されたものであることを明かしている。『儀禮注疏詳校』の內容を調べると、宋儒による校勘が清儒に影響を與えた同樣の事例が積みかさなっていくが、同書は『儀禮』に限定した校勘記であるから、影響の廣がりを十分に確認できない。そこで、考察對象を張舜徽が言及していた阮元『校勘記』に改めることにしたい。

（二）阮元『校勘記』に見る宋儒の校勘の成果

阮元『校勘記』は、清朝考證學の最盛期にその發展を支えた阮元が

實施した學術事業の精華であり、十三經の各種版本を揃えた上で、段玉裁や顧廣圻を含む校勘に長じた學者を動員して組織的に十三經すべての經注疏の文字を校勘したものである。[26] 同書所收の校語には、版本ごとの文字の違いが示されるだけでなく、校勘に關する多くの學者の仕事が參照されている。『校勘記』の校語を細かく調べてみたところ、以下のように二十名を超える宋儒の校語やその校勘を經た經傳のテキストが參照されていることが確認された（括弧内は校語中に表示される學者の名前や著述と別稱。括弧後の漢數字は參照回數）。調査對象の『校勘記』は、繙閲の便を考慮し、阮刻本『十三經注疏』附載のものを用いた。

01賈昌朝（群經音辨）：三九、02歐陽修（本義）：一、03劉敞（劉原父、春秋權衡）：二、04沈括（〔夢溪〕筆談）：一、05呂大臨（禮記解）：二、06晁公武（〔郡齋〕讀書志、蜀石經考異）：一二、07鄭樵（鄭漁仲、通志、鄭樵注本〔爾雅〕）：三、08洪适（隸釋、漢石經）：八六、09張淳（〔儀禮〕識誤）：一三、10洪邁（容齋隨筆、容齋三筆）：二、11孫奕（示兒編）：一、12朱熹（朱子、朱文公本、周易本義、〔儀禮經傳〕通解、論語集注、集注本）：一八四八、13張栻（論語解）：一、14呂祖謙（呂東萊、論語說）：二、15吳仁傑（兩漢刊誤補遺）：一、16黄榦（儀禮經傳通解續、續通解）：一二七、17蔡沈（〔書〕集傳、蔡傳）：一三、18李如圭（集釋）：六二二、19眞德秀（論語集編）：一、20毛居正（毛氏居正、毛誼父、六經正誤）：一二二、21魏了翁（〔儀禮〕要義、讀書襍抄）：一六二七、22楊復（楊氏、楊、儀禮圖）：五九〇、23岳珂（〔九經三傳〕沿革例、相臺本、岳本）：五三三七、24王應麟（王伯厚、困學紀聞、鄭易考、詩考、詩攷、玉海、漢制考）：一九〇

調査を通して確認された參照條數の合計は、一萬六百四十三條に上る。これらの校語は、たとえば『儀禮』鄉射禮鄭注の「插也插於帶右」句に對して、「兩插字、『釋文』・陳本・『通解』・『要義』俱作捷」（一二四頁上）[27] と指摘し、鄭注の二つの插字を朱熹『儀禮經傳通解』や魏了翁『儀禮要義』が捷に作ることを説明するように、宋儒の著作中における異文を示すにとどまる程度のものが多數を占める。しかしこの種の簡單な校語であっても、參照された書物自體は、宋儒による校勘を經ているものであることに留意したい。

參照回數が多い一人である魏了翁について言うと、理宗に政治の刷新を求めた上書が史彌遠らの不興を買って寶慶元年（一二二五）に靖州（湖南省）に配流され、以後、鶴山書院で講學する一方で執筆活動に勤しんだ。『儀禮要義』を含む『九經要義』は、この靖州謫居時の仕事であり、「たまたま持ってきた書物は繰り返し檢討を加えたが、やるべき作業は實に多く、人の手を煩わして近邊の士友の家から諸經の義疏を借りて、さらにそれぞれ編校作業を行った」[28] と魏氏はその作成狀況を語っている。手持ちの資料に徹底した校勘を加えるだけでなく、傳手を賴って「諸經の義疏」を借り出し、それらと對校した上で定めた經傳のテキストを『要義』に掲載したのである。

『校勘記』に見える宋儒の中、對校に使った資料の詳細がわかるのは岳珂であり、『九經三傳沿革例』の「書本」には、「唐石刻本」以下「家塾所藏」の二十種の版本と「越中舊本註疏」（越刊八行本注疏）以下の三種の版本、併せて二十三種の版本が示されており、『校勘記』において頻繁に參照されている「相臺本」は、これらの九經と『春秋』三傳との諸版本を校勘して成ったものである。[29]

阮元『校勘記』において宋儒の著作が對校資料として常用されるの

は、宋代に流通していた刊本や鈔本、すなわち清代には宋刊本や宋鈔本などと稱される古い書物を用いて校勘されているからであり、これらの書物の文字を示すだけでも、經傳の原形への復元を目指す考察を進める上で意味があると考えられていたのである。宋儒の著作中に見える經傳テキストに價値があることは、主校者として『校勘記』の校勘作業を主導した段玉裁も認めており、段氏は序文の中で「宋本を求めてそれを正しいとする者がいるのは、時間が經てば經つほど誤りが多くなり、古からの隔たりはかなりあるものの比較的ましだからであり、それは道理である」と說いている。ただし段氏はつづいて「しかし一般的に宋本の書が今の本より遙かに勝る部分は極めて少なく、まして毛居正・岳珂・張淳などの徒による校經は、いずれも學識が不十分なので玉石混淆である」[30]と指摘しており、宋儒の校勘を經た「宋本」テキストに對して批判的な態度も示している。

かかる態度は『校勘記』分校者も示しており、たとえば『詩經』邶風「靜女」經文「愛而不見、搔首踟躕」句下毛傳「言志往而行正」に對する顧廣圻の校語を見ると、「小字本同、閩本・明監本・毛本亦同」と諸本が同樣に作ることを示した後、「相臺本正作止」と相臺本だけが正字を止に作ることを指摘している。さらにつづく校語を見ると、「邶風・終風」鄭箋に「正猶止也」とあるように正字は止の意味を兼ね備えているから、「相臺本は非なり」[31]（『詩經』、一〇八頁下）と結論をくだしている。顧氏の見解によると、相臺本が止字に作るのは、毛傳の往字との對應を考慮して改字したためであるが、正字には止の意味もあるから、それは不必要な修正なのである。『校勘記』の中には、このように相臺本の誤りを指摘する校語がいくつか認められる[32]一方で、相臺本のみに見える異文に從っている箇所も見受けられる[33]。そもそも相臺本に言及される校語全體の中で、その文字に對する肯定的もしくは否定的評價が示されるのはごくわずかであり、大半の校語においては、有力な對校テキストの一つとして言及されるにとどまっている。段玉裁による「玉石混淆」（原文「醇疵錯出」）との評價は、相臺本を含め宋儒が提供する經傳テキストに對する『校勘記』の全體的な扱いにさほど大きな影響を與えていないようである。

（三）宋儒の校勘に對する分析と評價

阮元『校勘記』の中では、宋儒が經傳の文字に對して分析を加えたり適否に關する見解を示したりした言葉が引用されて、議論が進められることがある。

威字を「古本」は畏に作る。山井鼎は「古字では通用する」と說く。王應麟は「古文では『天明畏自我民明畏』に作り、今文が下の畏字を威に作るのは、恐らく衞包が改めたものであり、古文に從うべきである」と說く。○按ずるに、王が言う「古文」は、宋次道の家にあった本であり、依據できないことが多い。[34]（『尙書』皐陶謨經文「自我民明威」句下、六五頁下）

圈識（○）の前にある『書經』分校者の徐養原の校語においては、山井鼎が參照した「古本」、すなわち博士家が傳えた古鈔本にもとづく『古文尙書』が「自我民明畏」に作ること（『七經孟子考文』卷十五「尙書注疏第四・皐陶謨」）がまず指摘される。ついで唐代通用の文字である「今文」で書かれた『尙書』、すなわち『新唐書』藝文志に「今文尙書十三卷」とあるのにつらなる王應麟當時の通行本が畏字を威に作るのは、唐の天寶三載（七五四）に玄宗の詔を受けた集賢學士衞包による改字の結果だから、舊來の古體の文字である「古文」で書かれ

た『尚書』に従うべきだとする王氏の説（『困學紀聞』巻二「書」）が引かれる。さらに圈識の後に見える主校者段玉裁の校語においては、王氏が「古文」の『尚書』と見ているものは、宋敏求（字は次道）・王欽臣（字は仲至）の家本であって信用できない旨が説かれている。[35]『校勘記』においては、この事例のように宋儒の言説が批判的に取りあげられることがある一方で、以下の二つの事例に見られるように、校勘作業を進める上での参考にされることが少なくない。

皇本には若字の上に曰がある。朱子『集注』は、洪興祖が「『漢書』が引くこの句には、上に曰字がある。『上に見える樂字は曰字の誤である』と言う人もいる」と説くのを引く。案ずるに『漢書』敘傳上に「幽通賦」の「固行行、其必凶」を引き、顔師古の注に「『論語』に『閔子云云、子樂曰、若由也、不得其死然』という」とある。恐らく『集注』に見える「漢書」は、その下にあるはずの注の一字が落ちている。また孫奕『示兒編』に「子樂は必ず子曰に作らなくてはならない、字音による誤りである。最初に音が近いということで曰が悅に變化し、ついで義が近いということで悅が樂に變化した。（孔子が）由（子路）がまともな死に方をしないことを知っているなら、どうして樂しむことがあろうか」とある。今、『文選』（巻十四）「幽通賦」と（巻五十六）「座右銘」の二箇所の注を調べると、「子路行行如也。子曰、若由也不得其死然」と引かれているのは、孫説とぴったり一致している。[36]（『論語』先進經文「若由也不得其死然」句下、一〇三頁下）

本條では、『論語』先進經文「閔子侍側誾誾如也、子路行行如也、冉有子貢侃侃如也。子樂、若由也不得其死然」の樂字について、字音が近い曰の誤りだとする議論が分校者孫同元の校語の中で進められている。孫氏が自説の根據として擧げるのは、朱熹『論語集注』所引の洪興祖説と孫奕『示兒編』巻五「子樂」の指摘であり、兩者の指摘に當てはまる句形を呈する『文選』李善注所引經文の二條も傍證として引いている。もう一例見てみよう。

宋本・小字宋本・淳熙本・岳本・纂圖本・閩本・監本・毛本はいずれも霄に作る。岳氏『九經三傳沿革例』に云う、「『左傳』の傳文の顚末を詳細に調べると、その時、齊豹が衞侯（靈公）の兄の縶を殺したので、衞侯は脫出して死鳥の地へ行った。析朱鉏は夜に排水口から脫出し、徒歩で公の後を追ったので、公はこれに謚を賜った。注に『宵從公故』とあるのは、析朱鉏が宵に排水口から脫出して徒歩で公に從ったことで謚を賜ったからであり、宵は夜の意である。その字は宵に作るべきであり、そうすれば注と傳の前文とが一致する。今、諸本が注の部分をいずれも霄に作るのは誤りである。」（「註文」）案ずるに、岳氏は霄字が誤りであることをわかっているが、その誤りが生じた理由は把握していない。宋の殘本は「宵從竇出」を「霄從竇出」に作っており、宋刻の書籍は唐碑の文字に從うことが多い。たとえば「張猛龍碑」が宵を霄に作るのは字形の譌體や俗體であろうが、宋殘本もそれに從って霄に作り、後に霄から霄に誤られたのである。[37]（『左傳』昭公二十年注「霄從公故」句下、八六三頁下）

本條では、相臺本を含む諸本が昭公二十年の注文を「霄從公故」に作るが、岳氏はそれが誤記であり、『左傳』本文の文脈および注文との對應を考慮すると霄は宵に作るべきだと考える。自説を證據立てる版本を示し得ないのに「改字」を主張するのは武斷の謗りを受けかねないが、『左傳』分校者嚴杰は岳氏の校勘に贊同する。ただし嚴氏は、

文脈が通るというだけでは「改字」を行う妥當性を十分に確保できず、誤字發生の原因までさかのぼって説明できて、はじめて「改字」の正當性が論證できると主張し、それを實踐してみせる。

紙數の關係で三例しか紹介できないものの、阮元『校勘記』の校勘作業に從事した學者たちが宋儒の校勘について參考する價値があると認めていたことが確認された。もちろん批判を加えることもあるが、清儒は宋儒の校勘を自分たちの校勘と同質の營爲と見ていた。三番目の事例で取りあげられた誤字發生の一因については、「形近の譌」という汎用性のある類型的な原因説明を行うことが可能であり、分校者嚴杰はここではこの語を用いていないものの、岳氏が參照範圍に加えていなかった唐宋期の筆寫文字資料に見える異體字を參照して、「形近の譌」の觀點にもとづく説明をしている。[38] この校語に見られるような法則的・原理的な説明が清代において發達した部分だと言えそうであるが、この問題に關する議論は別稿に讓りたい。

結論と今後の展望

本稿では、考證學が清代限定の學問ではないという認識の下、宋代においてすでに考證學と見なし得る學術的營爲があったのではないかという問題を設定し、論點を辨疑と校勘の二項目にしぼって初步的な考察を加えてみた。その結果、宋代においても清代と同樣、多くの儒者が辨疑と校勘に從事しており、その成果が清儒によって參考にされたり、清儒に影響を與えたりすることがあったことが確認できた。

經傳の辨疑は古くからの傳承に變容をもたらすことにつながる行爲だから、辨疑が盛んに行われていたと見なされた宋代が否定的なニュアンスを伴って「變古時代」と稱されることがあるものの、漢代の傳統的な經學に回歸したと見なされた清代においてすら、「變古」に屬する營爲がかなり活潑になされていたことも明らかとなった。宋代の校勘は清儒から高い評價は與えられなかったが、その成果が無視し得ない水準に達していたことは、清代を代表する大型の經書校勘事業である阮元『校勘記』の一萬條を超える校語に、二十名を超える宋儒の校勘の成果が參照されている事實が雄辯に物語る。

初步的な考察を通して、「宋代考證學」と稱し得る學術的營爲が存在したこと、そして宋・清兩代の考證學につながりがあることがいささかなりとも確認された。今後、張舜徽が示している論點にもとづいて宋代における考證學的營爲の實態解明を進め、清代はもとより、その前の元・明期における考證學的營爲と比較考察していくことによって、漢學・宋學という既成の枠組みを離れて宋と清の學術を論じる環境整備ができるように思われる。その上で議論を發展させることができれば、宋學から清代漢學への推移を「儒家智識主義」の興起と發展という圖式で捉える余英時の見解[39]を補强しつつ、清代考證學に新たな意味づけを與えられそうである。

注

(1) 林慶彰『明代考據學研究』(臺灣學生書局、一九八六年修訂版)、三〇～三三頁。

(2) 張舜徽『訒庵學術講論集』(華中師範大學出版社、二〇〇八年)、二一二頁。

(3) 錢穆の文章は、『朱子新學案』第五册(三民書局、一九七一年)所收。張舜徽のように考證學を構成する學術領域全般を論じるのではなく、特定の論題に卽して宋代と清代の學術のつながりを論じることは、王國維

がすでに金石學に限定する形で行っている（王國維『靜庵文集續編』「宋代之金石學」、『王國維遺書』第五册所收、上海古籍書店、一九八三年。溫志拔『知識・文獻・學術史―南宋考據學研究』緒論三「學術史回顧」（中國社會科學出版社、二〇一九年）には、宋代の考證學に關する研究史が整理されている。

（4）梁啓超『中國近三百年學術史』第十三章～第十六章「清代學者整理舊學之總成績（一）～（四）」（朱維錚校注『梁啓超論清學史二種』、復旦大學出版社、一九八五年）。梁啓超は清朝考證學の「研究の範圍」について、「以經學爲中心、衍及小學・音韻・史學・天算・水地・典章制度・金石・校勘・輯逸等等」とも說明している。梁啓超『清代學術概論』二（『梁啓超論清學史二種』）、五頁。

（5）「辨疑」と似た語として「辨僞」があるが、「辨僞」は專ら「僞作の辨別」の意味に用いられ「辨疑」より狹義の語なので、本稿では「辨疑」の語を用いる。

（6）梁啓超『中國近三百年學術史』第十四章、三八四～三八五頁。

（7）以下の一覽は、葉國良『宋人疑經解經考』（國立臺灣大學出版委員會、一九八〇年）、楊新勛『宋代疑經研究』（中華書局、二〇〇七年）、楊世文『走出漢學―宋代經典辨疑思潮研究』下篇第八章～第十五章（四川大學出版社、二〇〇八年）等を參考にして作成した。

（8）『六經奧論』には鄭樵のみならず、その從兄鄭厚の說も取りこまれているので、同書に辨疑說が見える場合は、〔鄭樵〕と表示する。以下同じ。『六經奧論』の作者と成書の問題については、楊新勛『宋代疑經研究』附錄三「『六經奧論』作者與成書考」を參照。

（9）葉國良『宋人疑經解經考』附錄二「宋人疑經改經便檢表」には、宋代における百三十名の辨疑學者と各自が辨疑の對象とした經書が一覽表になっている。葉氏の表を增補した楊新勛『宋代疑經研究』附錄一「宋儒疑經便檢表」には、百六十五名の學者の名前が見える。

（10）苟輕於改而不知存古以闕疑、固學者之可罪。狃於舊而不知按理以復古、豈先儒所望於後之學者。王柏『詩疑』卷二「詩辨序」。

（11）清儒が取りあげていない論點は表示していない。宋儒の場合と異なり、清儒の辨疑の議論については參考になる先行研究に乏しい。主として佟大群『清代文獻辨僞學研究』（人民出版社、二〇一二年）を利用して探し出した關連記述の典據を表示した。

（12）佟大群『清代文獻辨僞學研究』附錄七「清代辨僞學者及其成就」。

（13）吉田純『清朝考證學の群像』第一章「閻若璩の尙書學」（創文社、二〇〇六年）、二九頁。

（14）有吳棫字才老者出、始以此書爲疑、眞可謂天啓其衷矣。閻若璩『尙書古文疏證』卷八第百十三條。

（15）朱子首覺其詐、後人因端尋之、至閻百詩輩、如讞獄盡發臧證。姚鼐『惜抱軒九經說』卷三「尙書說一」。

（16）案朱子此語則是明以二十五篇爲僞撰矣、惜其但與門人言之、未嘗自爲書傳、盡廢其僞而獨存其眞也。崔述『古文尙書辨僞』卷二「集前人論尙書眞僞」。

（17）原抄本と四庫全書本の『日知錄』は「肆直」を「溫良」に誤る。

（18）梁啓超『中國近三百年學術史』第十四章「清代學者整理舊學之總成績（二）」、三八五頁。

（19）（成帝）詔光祿大夫劉向校經傳諸子詩賦、步兵校尉任宏校兵書、太史令尹咸校數術、侍醫李柱國校方技。每一書已、向輒條其篇目、撮其指意、錄而奏之。

（20）「校勘（校讐）」の含義の問題については、胡楚生『中國目錄學』第一章第一節「釋名」（文史哲出版社、一九九五年）、管錫華『漢語古籍校勘學』第一章第二節「校勘與校讎」（巴蜀書社、二〇〇三年）、倪其心『校

勘學大綱』第一章第三節「校勘與校讎的區別」（北京大學出版社、二〇〇四年）などを參照。

(21) 鄭樵生千載而後、慨然有會於向・歆討論之旨、因取歷朝著錄、略其魚魯豕亥之細、而特以部次條別、疏通倫類、考其得失之故而爲之校讐。蓋自石渠・天祿以還、學者所未嘗窺見者也。

(22) 鄭樵と章學誠の目錄學については、古勝隆一『目錄學の誕生―劉向が生んだ書物文化』第九章「劉向の學を廣め深めた學者たち―鄭樵・章學誠・余嘉錫」（臨川書店、二〇一九年）を參照。

(23) 大抵古書有未安處、隨事論著、使人知之、可矣。若遽改之以沒其實、則安知其果無未盡之意耶。漢儒釋經有欲改易處、但云某當作某、後世猶或非之、況遽改乎。

(24) 某所改經文字者、必有意、不是輕改、當觀所以改之之意。

(25) 倪其心『校勘學大綱』、四六頁。

(26) 阮元『校勘記』の成書狀況については、拙稿「段玉裁と十三經注疏校勘記」（北海道中國哲學會『中國哲學』第三十一號、二〇〇三年）と關連論考を參照。

(27) 引用文後の「一二四頁上」の注記は、阮刻本『十三經注疏』（藝文印書館影印本）附載『校勘記』の揭載頁と上下の別を示す。以下同じ。

(28) 偶有帶行書册、再三尋繹之外、功夫儘多、從兩三郡士友家宛轉借得諸經義疏、重別編校。魏了翁『鶴山集』卷三十六「答蘇伯起（振文）」。

(29) 『九經三傳沿革例』と相臺本は岳珂の作とされているが、北京圖書館編『中國版刻圖錄（增訂本）』第一册「元・春秋經傳集解」提要（文物出版社、一九九〇年〔原編本は一九六〇年〕）、五六頁などによると、元初の岳浚の作である。相臺本は元刻本であるが、相臺岳氏の家塾に蓄積されていた宋代の書物と學術情報をもとに作成されていることに加え、清儒は宋本の一つと見ていたから、本稿では『九經三傳沿革例』と併せて宋儒の校勘の成果が取り込まれた書として扱う。岳珂と岳浚は俱に岳飛の子孫である。

(30) 有求宋本以爲正者、時代相積而愈譌、相距稍遠而較善、此事勢之常。顧凡宋本之書絕少大勝今本之處、況校經如毛居正・岳珂・張淳之徒、皆學識未至、醇玼錯出。この段玉裁序は、單行本『十三經注疏校勘記』卷頭所收。『經韵樓集』卷一收載の序文は字句に異同あり。

(31) 小字本同、閩本・明監本・毛本亦同。相臺本正作止。考文古本同。案正字是也。終風箋云、正猶止也、言正足包止義、不必與往字對文。相臺本非也。

(32) たとえば『詩經』邶風「谷風」鄭箋「言君子與己訣別」句校語に「相臺本訣作決。案釋文云、訣本或作決、相臺本依改、以爲決正訣俗也。考訣字說文在新附、而文選注引通俗文已有之、可不煩改。相臺本非也」（九七頁上）とある。

(33) たとえば『書經』旅獒疏「遊觀從費時日」句校語に「岳本從作徒。從字非也、形近之譌」（一九七頁上）とある。

(34) 威古本作畏。山井鼎曰、古字通用。王應麟曰、古文天明畏、自我民明畏、今文下畏字作威、蓋衞包所改、當從古。○按王所云古文、卽宋次道家本也、多不足據。

(35) ここの議論に見える『尙書』テキストの改訂の狀況については、小林信明『古文尙書乃研究』第二章第一節「衞包改字と宋次道王仲至家本」（大修館書店、一九五九年）を參照。

(36) 皇本若上有曰字。朱子集注載洪氏曰、漢書引此句、上有曰字、或云、上文樂字卽曰字之誤。案漢書敘傳幽通賦云、固行行其必凶。顏師古曰、論語稱閔子云云、子樂曰、若由也不得其死然。蓋集注漢書下脫一注字耳。又孫奕示兒編曰、子樂必當作子曰、聲之誤也。始以聲相近而轉曰爲悅、繼又以義相近而轉悅爲樂。知由也不得其死、則何樂之有。今攷文選幽通

賦及座右銘兩注、竝引子路行行如也、子曰、由也不得其死然、與孫說正合。

(37) 宋本・小字宋本・淳熙本・岳本・纂圖本・閩本・監本・毛本竝作霄。岳氏九經三傳沿革例云、詳考傳文本末、時齊豹殺衞侯之兄縶、衞侯出如死鳥。析朱鉏宵從竇出、徒行從公、公入而賜之謚。注云宵從公故、蓋以其宵自竇出徒行從公而賜謚、宵、夜也。其字當作宵、則注與傳上文合。今諸本於注皆作霄、誤也。案岳氏知霄字之誤、而未得誤之所由。宋殘本宵從竇出作宵從竇出、宋刻書籍多從唐碑、如張猛龍碑宵作宵、蓋字形之譌俗、宋殘本亦遂作宵、後又因宵而譌爲霄也。引用原典は原文中の四カ所に見える「宵」(「宵」の異體字)を誤刻しているので、單行本『校勘記』に從って改めた。

(38) 注(33)に例示されるように、『校勘記』の中では、誤字の發生について「形近之譌」の觀點からの說明がしばしばなされている。

(39) 余英時『論戴震與章學誠—清代中期學術思想史研究』內篇(龍門書店、一九七六年)など。

〔附記〕本稿提出後、査讀擔當者から修正意見を頂戴し、それを參考にして一部手直しした。貴重な助言をしてくださった査讀擔當者に謝意を表する。なお本稿は、中央大學文學部研究促進期間制度(二〇一二年度)による研究成果の一部である。